

# 『女性満洲』と戦時下のいけ花

小林善帆

## I はじめに

「満洲」（以下、満洲と記す。）研究は、政治経済的視野からの研究蓄積に加え近年、文芸を含む文化・教育、ジェンダーの視点からの考察も進むが、いけ花（花道・華道）、茶の湯（茶道）など日本の伝統的文化の観点からの考察はみあたらない<sup>1)</sup>。

しかし『満洲日日新聞』の創刊間もない1907（明治40）年12月、いけ花が茶の湯とともに女性の修養であると述べられ<sup>2)</sup>、以後、いけ花講座の連載があること。1925（大正14）年8～9月に開催された大連勸業博覧会で、いけ花展が連日開催された<sup>3)</sup>ほか、大連の百貨店でいけ花展が随時開催されていたこと。1942（昭和17）年ころ大連市連鎖街の銀座花店には、店内常設のいけ花展といけ花稽古場があり、いけ花用材を各種販売しているなど、いけ花が満洲都市部の人々の身近にあるものであったことがわかる。またいけ花は「内地」<sup>4)</sup>よりも、「外地」の女学校・高等女学校において熱心に教えられる傾向にあり、同地においても取り入れられている<sup>5)</sup>。

注目するのは、1937（昭和12）年日中戦争以後、南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と記す）では沿線に住む男性社員留守宅家族（女性）を対象に、いけ花の講習会や講演会を行い、それは終戦まで続いたこと。さらに1942（昭和17）年1月、戦時下の言論統制政策により「全満唯一の女性文化誌」として創刊された日本語雑誌『女性満洲』<sup>6)</sup>に、この満鉄のいけ花講習会講師が担当する「いけ花講座」が連載されたほか、いけ花に関する言説が見出されることである。戦時下の言論統制政策のもとで、一般的に「花嫁修業」<sup>7)</sup>と位置付けられていたいけ花が、同政策にどのように必要とされ、またそのいけ花とは、どのようなものであったのか。

いっぽう同誌は「全満唯一の女性文化誌」としてあったにもかかわらず、これまで研究対象にされていない。

このことから最初に、『女性満洲』「いけ花講座」担当者のいけ花観、活動内容、ひいては満洲におけるいけ花について考え、さらに「内地」のいけ花と照らし合わせ考察する。次にこれを踏まえ、『女性満洲』のいけ花に関する言説を検討する。研究史において光があてられてこなかった、いけ花<sup>8)</sup>という観点から『女性満洲』を読み解くことで、雑誌メディアが語る満洲の新たな一面が描き出せると考える。

本稿における満洲とは、中国東北部全体をさすものとする。表記は新字体を使用した。

## Ⅱ 満洲におけるいけ花

### 1. 堀川一楓の活動

1942年1月創刊の『女性満洲』「いけ花講座」を担当したのは、伝統的ないけ花流派<sup>9)</sup>、また経験豊富な高齢の師匠、男性師匠も多いなかでそういった人々ではなく、堀川一楓（以下、堀川と記す。）という32歳の女性華道家であった。堀川は「満洲国」が建国された1932（昭和7）年、22歳で心機一転夫とともに高知から大連に移住した。それは骨を埋める覚悟の渡満であった。当初、満洲日日新聞主催のいけ花講習会で教え、大連市の幾久屋百貨店でのいけ花個展の成功で大連花道協会会長馬野雅風氏に認められ、満鉄総裁室福祉課からいけ花講習会の要請をうけ、同講習会の成功により満鉄のいけ花講習会嘱託講師になった。

1937（昭和12）年、日中戦争勃発以後、満鉄の男子社員は鉄道建設のため華中、華北に長期出張し、留守宅家族が多くなったため、会社は保全対策として留守宅相談所を設置、さらに留守宅家族を対象に茶の湯・洋裁・染色などとともに、いけ花の講習会や講演会を催した<sup>10)</sup>。昭和十三年満鉄社員会機関誌『協和』の付録雑誌『主婦のお買物案内』<sup>11)</sup>には、生活必需品として花切鋏、いけ花の道具、花瓶などが扱われており、これを裏付ける。

巡講箇所は旅順、大連（市内八カ所の研修所）、瓦房店、大石橋、遼陽、蘇家屯、奉天（市内三カ所）、安東、橋頭、四平街、新京、鉄嶺であり、南満洲区域の一等駅とされている場所であった。講習会日程は満鉄側が作り、講習地では満鉄駐在の福祉係が万事を取り仕切った。講習会は日曜以外の毎日あり、堀川は列車に乗って沿線の指導に赴いた。この講習会は終戦まで続いたという<sup>12)</sup>。これらの活動は堀川とともにその門下の人々によって行われた。

満鉄のほか三越デパート、国際運輸、大連税関、大使館、遼陽陸軍病院看護婦、大連大同学院（1932年大連大同女子技芸学校・中国人対象）、さらに大連近郊金州の「上流中国人女性」たちにも教え、1943（昭和18）年からは、旅順の関東軍女子通信部隊の隊員にも教えるようになった<sup>13)</sup>。しかし管見の限り堀川が日本人を対象とした女学校・高等女学校、婦人会で教えたことを見出せない。

以上のことから、堀川のいけ花活動は特に日中戦争勃発以後、満鉄のいけ花講座とともに歩み、旅順・大連はもとより満鉄沿線におけるものであった。さらに会社、税関や大使館などのほか上流の中国人女性を教授対象とし、1943年からは、旅順の関東軍女子通信部隊でも教えるなど、戦争が激化するなかでも女性にいけ花を教えたことから、いけ花によって女性を統制しようとする動きがあったことが思われる。

### 2. 堀川一楓のいけ花理念

堀川は、土峰流<sup>14)</sup>といういけ花の流派に属しており、渡満の際、家元は「たいへん喜んで、大きな希望をかけてくれた。と同時に、流としての様々な条件と責任を託された」という。しかし1934（昭和9）年11月、自ら青蘭流の濫觴である「青蘭林」を結成した。青蘭の「蘭」は「満洲国」の国花が蘭であることに由来し、日本人はもちろんのこと中国人も含んだ幅広い性格の団体であった。それは次のような悩みがあったのであった。

満鉄側の要請と、土峰流の規定に相違があった。渡満の際、土峰流家元から、一稽古をは

じめると同時に流入門の手続き、資格進級、二年間で教授資格を与える—という流の規定を厳密に適用するように約束させられていた。一方、満鉄側の意向は、(イ)日満親善 (ロ)社員情操教育 (ハ)社員留守家族慰安 が目的であるため、金銭を交えた流の規定にはそいがない。15)

このため土峰流家元から流の規定に伴う注意や勧告を再三再四受けたという。また理念として、日本と満州では気候風土も違う。それなのに、いけばなは日本の伝統のものであるからといって、それをそのままもち込むのはどうしても無理が生じる。満州には、満州にふさわしいいけばながあって当然ではないだろうか。また、満州は、日本人と中国人が協力して新しい国づくりにはげんでいる。それなら、現地の中国人にも喜ばれ、受け入れられるような、かれらの生活様式にもあうような花が考えられてよいのではないか。満州には美しい山野草もふんだんにある。冬期の気候条件は、日本などと比べものにならぬほど厳しい。そういうときは、すすんで枯れものや鳥の羽根なども取り入れてよいのではないか。狭い流派の花ではなく、身近の自然と一体となった、真にその風土に根づきたいいけばなこそ、必要なのではないか。16)

と考えたことによる。

具体的な活動としては1934（昭和9）年11月の青蘭林結成において、堀川は以下の考えを即座に実践するようにつとめたという17)。

- ① 日本から輸入する花材だけに頼らず、現地に生育する植物を積極的に使用する。
- ② 花器も、専用花器をできるだけ避け、現地にある生活雑器などをどしどし応用する。
- ③ 現地の人々が好み、日常見馴れた植物を用いる。
- ④ 床の間にこだわらず、生活様式にマッチしたスタイルを創造すること。
- ⑤ 冬期生の植物がないときは、貯蔵されている野菜や、切り花を室内で発芽・開花・保存させるなどの工夫をして用いる。また、鳥の羽根、枯れもの、乾燥植物なども取り入れる
- ⑥ 水盤の水を染料で着色。また、砂、ガラス、貝類、鉱石などの応用。
- ⑦ 社中団体名は、現地の人に好まれる文字を用いる。

堀川のめざすいけ花が、日本の伝統的な花材、花器、水、設置場所を踏襲したものでなく、「現地」満洲に住まう者のためのものであったことがわかる。また満洲の風土に根差そうとするものであった。塚瀬進18)によれば、満鉄は当時「現地適応主義」の方針をとり、満洲を生涯の活動の場所と考えることを良しとしていたというが、堀川はいけ花はそのような立場に立つものであり、いけ花講習会講師としての採用も領ける。

堀川はその後1937（昭和12）年、いけ花愛好者のみの団体「いけ花・青蘭」を結成、土峰流との決別は1940（昭和15）年1月ころで、1942年1月発行『女性満洲』創刊号には自らの肩書を、「青蘭流家元」と明記している。

### 3. いけ花の様式と満洲

いけ花には時代が生み出した様式がある。満洲における青蘭流家元堀川一楓のいけ花は、様式として「盛り花」「投入花」19)であった。この堀川が高知県で属していた土峰流20)も同様の様式を持ち、同流家元立石一有は、この様式ならびに「生花」様式のいけ花の名手であった。堀

川は立石氏の最も優秀な弟子であったという。

昭和初期、いけ花様式の主流はむしろ「生花」であった。この「生花」とは、床の間に置くことを考えて作られた、江戸時代中後期から続くいけ花の様式で、花材、花器は決められたものがあり、剣山を使用しないため、決められた形に立てるにはかなりの修得（習得）期間を要した。また決まりごとや水揚方法などが秘伝とされることもあった。

それに対し「盛花」「投入花」は明治中後期以降に、いけ花を置く場所、花器、花材を洋風の暮らしにも合うように考案されたいけ花様式である。「盛花」は剣山や七宝に挿し、「投入花」は花材を瓶に簡易に固定させるだけで、花材を決められた形に作るができるため、「生花」にくらべかなり修得が容易で、花形を傾斜角度等で説明するテキストも出され、水揚方法に科学的な面も取り入れられ、花材も西洋から入ってきた植物を用いるなどということから、昭和初期にはかなりの人気を得ていた。

満洲のいけ花の最大の悩みは、寒い土地ゆえに花材の確保が難しいことにあった。日本から送られてくる花材は鮮度が落ち、早く痛んだし、最初から生気がないものすらあった。しかし「生花」様式のいけ花は、決められた花材があるため、満洲の花材を使用することにはためらいがあった。しかし「盛花」「投入花」は西洋の花材を使用することもあり、満洲の植物を使用することに抵抗を感じずることは、「生花」ほどではなかったと思われる。

いっぽう、満洲の地で旧来の稽古事としてのいけ花や茶の湯がなかったわけではなく、高等女学校では池坊や古流の「生花」様式のいけ花が教えられ、国防婦人会の催しでも池坊が教えられている<sup>21)</sup>。

#### 4. 勅使河原蒼風のいけ花

堀川は、1940（昭和15）年6月、満洲を訪れていた草月流家元勅使河原蒼風<sup>22)</sup>（以下、蒼風と記す。）をあじあ号のなかで偶然見かけ声をかけた。両者はその時が初対面であった。草月流は勅使河原蒼風が1927（昭和2）年に創立したいけ花流派で、いけ花の様式としては青蘭流と同様に「盛花」「投入花」が教えられた。当時蒼風40歳余、20代半ばで自らの流派を興し、造形的ないけ花の旗手的存在であった。堀川にとって、かつて東京で草月流展覧会を観てから蒼風は憧れの存在であったというが、その経歴もまた堀川に似る。ここでは堀川の活動・言説を、「内地」の華道家蒼風のそれと照らし合わせることから検討する。

##### (1) 『草月箋』にみる勅使河原蒼風の活動

『草月箋』とは、昭和戦前期に草月流家元が発行した非売品の機関紙で、1938（昭和13）年～1943（昭和18）年発行のものが現存する。

蒼風の活動の様子として、1938（昭和13）年9月1日発行の『草月箋』に、蒼風が「明日は各婦人雑誌等から依頼の写真作をうんとまとめてつくらねばならぬので」と述べている。当時蒼風は『近代女性』『婦女界』『婦人倶楽部』『婦人公論』『処女の友』『キング』をはじめとする雑誌、『報知新聞』『読売新聞』『満洲新聞』『国民新聞』『福岡日日新聞』などの新聞に、いけ花作品や随筆を掲載し、NHK大阪放送局（JOBK）や同東京放送局（JOAK）のラジオ番組に出演していた<sup>23)</sup>。メディアにのり、蒼風のいけ花は日本社会に知られていたといえよう。また東京

府下、東洋英和女学校をはじめ各種女学校、女子専門学校の課外に、大学、婦人会館の講座、花嫁学校といわれる場所へ、蒼風自身や草月流門下の人々が教えに出向いている<sup>24)</sup>。

(2)『草月箋』における言説

1939（昭和14）年4月10日発行『草月箋』63号「連載 教場めぐり5」家元監事 岡野月香  
東京第一病院の人が花を教えてくださいといふ。毎月傷病兵の看護をしてみると、その御苦労が思われて看護している自分が苦しくなってきた夜も眠れないんです。友達も、みなそう申してをります。先生のお花を習はせて載いて、心を静かにして御国の為に傷いた傷病将兵の方につくし度いといふんです。

1940（昭和15）年1月1日発行『草月箋』72号「紀元二千六百年を迎えて想う」家元監事 野口露秋

皇紀二千六百年を迎へる草月流としては、花道に精進するものの使命としてもこの際、軍需民需の産業方面等に寸暇なく働かれる方々の為め、時折みんなで花を贈ってお慰め申し上げやうではないか。

もちろん草月流では、事変以来各軍部病院などへいけばな慰問は行なはれてをりますが、もっとも私たちは協力いたしまして、家元の主旨に添ふやうはげみたいものと痛感いたします次第で御座います。

蒼風の高弟の言説から、1939～40年ころ、いけ花を御国のために尽くす一助となるように、また戦争協力に役立てるものと、位置づけていたことがわかる。

(3)蒼風と満洲・中国

1940（昭和15）年5月12日～6月18日まで、蒼風は「華道報国満支行」として、門下3名とともに中国大陸を訪れた<sup>25)</sup>。13日神戸出帆、上海、蘇州、南京、青島、済南、天津、北京、大連、奉天、新京、ハルビンを基地として、現地前線諸部隊ならびに、陸海軍病院の皇軍勇士をいけ花で慰問、「新支那」中央政府への奉祝献花、「満支」名流大官夫人令嬢への、日本華道の紹介が主なる目的であった。各主要都市では、ラジオ放送をはじめ、「日満支」それぞれの文化団体、新聞社主催の講演会、講習会、作品発表公開をした。この旅行で蒼風は、「故国の花を御覧に入れたらまたなつかしく思われることだろう」ということから、花材はなるべく「内地」のものを使うようにしたという。

最初に訪れた上海では、「上海に上陸したその足で、上海の陸戦隊本部司令官の室に白い菖蒲を高々といけた」という。花材が痛まないうちにとの思いがあったのであろう。また同地で、「中国要人の婦人達に華道を紹介」した。

南京では総司令部へ挨拶、同室にいけ花を「謹挿」、遺骨奉安室にいけ花を捧げた。翌日部隊慰問、西尾総司令官の室に同様に献花。翌々日大使館、領事館、南京市長室に献花。南京国防婦人会では民会の後援でいけ花実演と講演会をおこない、「中国知識階級婦人に日本精神の発露たるいけばなの真髓を説き、南京婦人の文化的融和に資する筈である」とした。青島での講演は、「缶詰空缶利用の插花法」であった。

大連には1週間ほど滞在し満洲日日新聞社、満洲婦人新聞社、大連市役所、満鉄本社、国防

婦人会、大連神明高等女学校、大連弥生高等女学校などでいけ花実演や講演会。旅順海軍慰問、大連陸軍慰問ほか、「日本のいけばな」と題しての放送を行った。

新京（現在の長春）において蒼風は、寄稿している満洲新聞社望月女史の案内で、満洲国中央銀行初代総裁栄厚氏夫人に、蒼風がいけ花を通訳付きで説明。新京陸軍病院に於て、いけ花による傷病兵慰問、また新京国防会館で満洲新聞社主催の講習会、そこでは「満洲でお花をお活けになる方は、なるべくその土地に咲く花をお用ひになることで、花器もあり合せのもの何んでもかまひません」と話したという。

以上のことから、蒼風は満洲・中国に「報国」として訪れ慰問、献花、「謹挿」し、婦人会や高等女学校でも「日本精神の発露」「文化的融和」を前提にいけ花の実演や講演を行った。ラジオ出演もしている。献花として日本のいけ花を強調する時は日本の花材を使用、満洲や中国大陸に暮らす人々には当地の花材や花器でと話した。中国人上流階級の女性にも積極的にいけ花を紹介している。しかし蒼風はあくまで日本のいけ花の紹介であった。また蒼風の訪問（慰問）先から、いけ花と陸海軍が、いわば戦争が遊離した関係ではなく、むしろ、いけ花に携わる者の方から戦争体制に組み入っていく姿勢が見られる。

いっぽう堀川は、満洲に生きる者のためのいけ花として青蘭流を興した。それは様式としては「盛花」「投入花」で、蒼風のいけ花作品と同様の様式であり、彼の造形的作風は憧れであった。しかし同じく満洲に咲く花を用い、あり合わせの生活雑器を花器として使用したとして、蒼風はそこに日本人としての日本の地にあるいけ花を思い描き、堀川は満洲の気候風土を考え、さらに日本人、中国人の区別なき満洲の地に根差すいけ花を思い描いていた<sup>26)</sup>。

### Ⅲ 『女性満洲』にみるいけ花

#### 1. 『女性満洲』の発行

『女性満洲』は1942（昭和17）年1月に創刊、発行は月1回。国の言論統制政策により幾つかの雑誌・新聞が統合されて出されたもので、当該期以降の満洲における女性社会を反映する唯一の雑誌といえる。

現在、創刊号（写真1）から1943（昭和18）年2月号まで、その間1942年7月号・10月号、1943年1月号を除き、計11冊が残されている。廃刊年月は定かではない。発行の目的は、女性文化誌として戦時期の士気を高めることに貢献することであった。

創刊号巻頭グラビアは、開拓団員の妻の農作業風景の次に、「新春のいけ花と茶の湯」として、青蘭流いけ花作品の写真3点と草川流茶の湯点前をする女性の写真2点を掲載していることから、同誌の女性文化観に、いけ花や茶の湯が強くあったことがわかる。

いけ花に関する堀川の言説は創刊号、同年2月号以降に連載された「いけ花講座」に見出せ、ほかに各種企画記事のなかにもいけ花に関する言説が見出せる。同じく連載講座があったのは洋裁・美容・料理で、その後それに教養・園芸・保健が加わった。

ほかに時局解説、短編小説、詩、短歌、随筆をはじめとする文芸、満洲における生活についての内地に住む者からの提言。満洲の女性の生き方を考える特集などが掲載され、名実ともに当地に生きる女性のための雑誌であった。読者の多くは満洲都市部に住み、経済的に余裕のあ



写真 1  
『女性満洲』創刊号 表紙  
1942年1月  
満洲婦人新聞社発行

る女性たちであったと思われる。

## 2. 「いけ花講座」にみる言説

創刊号ならびに1942年2月号以降掲載の「いけ花講座」, 毎回2頁分における, 堀川のいけ花に関する言説を見ていく。

創刊号では「華道時評 戦時下の活花」と題し, 「常に右に劔を左手に筆をもつというような武と美が融合した血潮こそ日本人の姿」であり, 「日本固有の芸道により心のゆとりを培養し, 国民の士気を昂揚させる」ことが必要であると述べ, その主張は以下の4点に集約できる。

- 一, いけ花を学ぶ事とは, 花を瓶や鉢や壺に挿すという事をだけ習うものではなく, 花を生ける時の心の持ち方, いわば精神的なものがある。
- 二, 時局下に特にいけ花が盛んになったのは, 武にのみ走って, 騒々しさのみに慣れて, 日本人の真のゆとりを忘れない一つの証拠であり, 現時のいけ花の盛況があると思われる。
- 三, 戦時下のいけ花はもつと安価な花と, 有り合わせの器に, 立派に生けることが出来るように心掛けるべきである。また空爆下に於いてもいけられるものが要求されるべきである。
- 四, 遊び半分でない, 女性の本能を発揮し, 時局下の女の座をしっかりとつかみ, この時局を征服し, 日本人の榮, 東亜共榮圏の榮の一時となることを念願としなくてはならない。

ここでは, いけ花の精神性, 効用, 決して浪費ではないこと, 真剣さを持つものであることを強調し, いけ花が戦時下に必須のものであると位置づけている。

次に, 「いけ花講座」第1回(同年2月号)をみると, 冒頭でいけ花の稽古に対し次のように述べている。

寒風について家路に辿りつきホット一息した眼にうつる玄関の一輪の花、円居する食卓の一輪の花、随時に随所に挿れたそれらの花は、私達の複雑な日常生活にどれだけ新鮮な潤いと親しみを持たせてせまられるでせうか、然し挿花を稽古すると言う事は決して単なる娯楽や慰安ではありませぬ。

日本特有の花道芸術として連綿と続いて来た、幾百年の伝統から「いけ花」をけいこする事が、単なる技術の修得に止らず道を学ぶ、即ち精神を学ぶ事にある事を知って頂きたい、一枝一葉もゆるがせにせぬ、自然の「美」に対する鋭い追求は其の侘魂の練磨であり、日本精神を把握するものでなくてはなりませぬ。

簾に桜花をさし、戦場に望んだ武人にして死生の覚悟に徹してゐた事を思へば堅忍持久の長期戦に余裕綽綽、花道に魂を打込んで、精神練磨の道場として頂き度い、凡そ一国の文化の低い国に強国はあり得ません。此の超非常時にいけ花を稽古し、精神修養にあたる事の如何に重大性あるかを認識し大に勉強致しませう。

ここからは、いけ花や茶の湯は修養<sup>27)</sup>や礼儀作法を修得するものとしてあるものの、娯楽・慰安として親しまれるものでもあった。これに対し講座では、戦時下に相応しいいけ花として「日本精神を把握するもの」「精神修養」と位置づけている。この「精神修養」<sup>28)</sup>という思潮は、当時「内地」のいけ花においても取り入れられていたものである。また、ここでは玄関や食卓に置く事が想定されているが、同年12月号では正月向けに、床の間に置くいけ花について説いている。

さらに記事では花材の選び方として、「新しい今日のいけ花には材料の組合せに制限があったり、枝の本数に束縛があったり、水揚げに秘伝あるとて、秘密にしてみたりする様な約束はある筈はありません。」とし、器の選び方として、花器に応用出来得るものとしてコップ、フルーツポンチ器、砂糖入器、硝子の深鉢、ジヨッキグラス、洋酒の空瓶、ざる果物籠、水さし、徳利などが記されている。まさに「有り合わせの器」である。以下、各回講座はいけ方、飾り方を寸法、角度を明記し絵図を交えて丁寧に解説している。

同第2回(同年3月号)では、「戦勝の春、(中略)日本人であればこそ、此の春を草木と共に、迎える事が出来る」とある。また「真<sup>しん</sup>」(いけ花において中心になる枝)に満洲にある植物を使用するように、花材(杏子、柳、連翹、北京桃など)を明記している。

同第4回(同年5月号)では、いけ花が茶の湯や俳句とともに「贅沢な暇つぶしの様な遊び事に間違つて考へられてゐる」「華道こそ、健全な精神を与えられ美しい情操を養ふ資材であります。健全な精神によって、幾年続こうとも今日のいくさに勝ち抜かねばなりません」とある。いけ花を「華道」と記し、「道」ということを強調している。さらにここでも「真」に用いる満洲の花材が、明記されている。

以上のことから日本人であることが強調され、戦時下にいけ花を行う事が暇つぶしの様な遊び事ではないことが強調されているいっぽうで、いけ花の中心となる「真」の枝に、満洲の植物を使うことが提案されている。日本人としての戦時下、いけ花による精神性を説きつつも、堀川のいけ花理念としてある、満洲に生きる者のためのいけ花、ということが実践されている。



### 3. 企画記事にみる言説

同誌では「いけ花講座」以外においても、いけ花への言及が見出せる。それらの言説は各種企画記事にみられるもので、堀川自身のものではない。

#### 一、創刊号〈働く女性の心構へ〉「強く正しく明るく生きむ」国際運輸株式会社 竹田伸子

従来のお稽古事に対する曖昧な態度を改める事である。お茶にしるお花にしる折角師匠についたからには唯常識として表面をなでる様な態度をとらず、もう一歩進んでその底に流れる道の精神の把握にまで探究してゆくべきであり。同時に一つ、之と定めた事に対し全力を集中してその道に於ては人をも指導し得るだけの確実さをもちたいものである。いわゆるお稽古の名にかくれての虚栄と時間潰しの旧体制は絶対に許されないのである。

国際運輸株式会社は、堀川がいけ花を教えていた会社である。言説に堀川の影響が見出せる。

#### 二、同年2月号〈もののははれとにっぽん女性美〉「松竹大船映画監督清水宏に、女性観を訊く」(清水)女優さんが、毎朝十時に来て生花と茶の湯を一通りやるのです。茶の湯をやらないからといって、お茶を飲むのに困るとか何とかいふのではないが、茶の湯をやった者は道を歩いていても、自然にそれが何かに現れて来る。あれは確かに効果がある、日本的なよさである。満洲に来て茶の湯は、女は一通り心得て貰った方がいいと思ひます。

(中略)

(記者) 日本人的な風格を失はないやうに、茶をやり活花をやることはいいですね。

(清水) あれを誰でもやるやうにして、女の一つの修業でなしに、朝起きて顔を洗ひ、飯を食ふと同じやうにやつて貰はなければならぬと思ふ。

#### 三、同年4月号〈職場の女性から前線の兵隊さんへ〉「大和撫子の名にかけて」大連機械製作所女子青年隊

会社では毎週水曜日に、婦道育生の為特に華道が教授されております。どんな場合にでも落着いて花が活けられる気持ちだけは育ひ度いと思ふのです。例ひ洋装の儘でも昔の日本女性になった様な気が致しますし、自然の草木は緊張した生活を慰め、潤ひのあるものにしてくれますもの。

#### 四、同年6月号「留日女学生の家 牛込寮の記」

ここでは他の記事と異なり、東京で寮生活を送る満洲国の中国人女子留学生に、草月流勅使河原蒼風によるいけ花、和服を体験させる話を掲載している。

#### 五、同年9月号〈現地座談会〉「北京の女性に尋ねる」華北交通会社勤務草野豊子

女としての教養や趣味の問題について申しますと、りっぱな活花のお師匠さんを東京から呼んで私たちのために指導して下さいます。

(中略)

#### 同、華北交通「興亜」記者大島忠雄

あんまりハキハキしすぎても困るから活花やお琴や、お習字をやるとちょうど調和がとれて、丁度い、女性ができ上がる。

以上のことから女性の視点として、いけ花に対し「道の精神」の把握、日本女性としての生活の潤いのため、男性の視点として「日本人的な風格」の維持、いけ花などをやると女性のいかたちができる、ということが見出せる。また北京の会社では師匠が「内地」と同じである

ことを重視している。

いけ花が、日本人女性としての形成に内面的にも、外面的にも関わると捉えられている。また満洲に根差す、「調和」をとることをめざすいっぽうで、「内地」と同じであるということも重視する人たちもいたということがわかる。中国人女子学生に対し、いけ花、着物を身につけることで、日本人女性であることを体験させている。

堀川が担当した「いけ花講座」は毎号掲載（連載）されたが、以上のようないけ花に関する言説は、毎号に見られるわけではなく、1942年9月号以後には見出せなくなる。

#### Ⅳ おわりに

『女性満洲』（以下、同誌）におけるいけ花の言説は、堀川のものとし、市井の人々によるものの、2通りに分かれる。まず堀川は、戦時下満洲におけるいけ花を発信する立場に立ち、その言説は、「華道こそ、健全な精神を与えられ美しい情操を養う資材」であるとし、この「健全な精神」により戦争に「勝ち抜かねばならない」ことを強調し、いけ花を、戦時下「内地」においてもいけ花の思潮としてあった、「精神修養」と捉えた。また花材は満洲の植物を用い、花器は満洲の生活で身近にある器、瓶を使用してもよいとし、満洲に生きる者のいけ花をめざした。

いっぽう、市井の人々のいけ花に対する言説から、一般的にいけ花が、日本人女性としての資質を養い、アイデンティティの形成に影響をあたえるものと認識されていたことがわかる。ここからは日本人の純粹培養志向が感じられる。

しかし市井の人々の言説が1942年9月迄であったことに対し、「いけ花講座」はそれ以後も連載が続けられたことから、堀川の言説が、同誌の発刊目的である戦時期の女性の士気を高めることに貢献するものであり、さらに同誌は、堀川が理念とした満洲に根差すことを求めていたと考えられよう。

また、いけ花の家元と市井の人々の間に、いけ花に対する意識の隔たりがあったことは興味深い。それは家元や高弟たちが流派の存続を願い、いけ花を戦争体制に組み入れていかざるを得なかったことがあると考える。その一方で1943年、旅順の関東軍女子通信部隊において、戦争が激化していくなかで堀川がいけ花が教えられたことは、関東軍により、いけ花で、女性の精神的な統制をしようとする動きがあったことが思われる。

堀川がいけ花とは、旧来からある単なるお稽古事ではなく、自由な創作による造形的いけ花であり、花材に対する制限や秘伝はなく寸法、角度が明記されるという、まさに近代のいけ花であった。これは「内地」における勅使河原蒼風のいけ花と方向を同じくし、いけ花をお国のために尽くすもの、戦争のためと位置づけたことも同様といえよう。両者の違いは、堀川は満洲での永住を考え、日本人と中国人の区別なきことを思い、いけ花を純粹な気持ちで戦争のためのもの、と位置づけた感があることであろう。

また堀川が満鉄のいけ花講習会講師に就任した1937（昭和12）年、その12月、「満洲国」の治外法権撤廃により、日本と「満洲国」の行政の一体化がはかられ、「日本人の対満進出を容易に進めるためにも、満洲国の全般的日本化が必須の要件として声高に叫ばれた」<sup>29)</sup> というのが、同誌のいけ花に関する言説から、その日本化にも相容れない2つの流れがあったことがいえる。

1つは、日本（「内地」）のものをそのまま満洲に持ち込む。もう1つは、満洲に根付くように満洲の実情を考案して、現地満洲のものも取り入れるという方法である。堀川によるいけ花の言説が、国の言論統制政策ならびに満鉄の方針に則ったものと考えられることから、少なくとも同政策と満鉄においては、後者の方法で満洲の統治を行おうとしたといえよう。

## 注

- 1) 『日本植民地研究の現状と課題』日本植民地研究会編 アテネ社 2008年ほか。
- 2) 『満洲日日新聞』複製マイクロフィルム 中国経済発展研究所 1997年を使用。『満洲日日新聞』は1907（明治40）年11月3日大連で創刊、満鉄の機関誌的存在であった。記事は1907年12月10日、1908年2月13日ほか。
- 3) 『大連勸業博覧会誌』大連市役所編 大連勸業博覧会協賛会 大正15年、51頁。出版流派は遠州流、池坊、廣道流、東山流。第一会場内能楽堂において、能狂言の上演時を除く毎日開催。
- 4) 「内地」とは日本固有の領土をさし、「外地」とはそれ以外の領有地、すなわち朝鮮・台湾・樺太・満洲・南洋群島などをさした。
- 5) 拙稿「植民地台湾の女学校といけ花・茶の湯」『藝能史研究』189号 2010年、拙稿「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法 ―植民地台湾との相互参照を加えて」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』47集 2013年、拙稿「近代女子教育における茶の湯 ―植民地朝鮮の女学校・高等女学校の事例をふまえて」『女性研究者による茶文化研究論文集』茶文化研究発表会実行委員会編（茶学の会内）2013年  
満洲の女学校・高等女学校に関しては、「いけ花にみる「満洲」都市部の女性と文化・教育」として、2014年5月、マイグレーション研究会 於阪南大学あべのハルカスキャンパスにおいて報告した。今後、稿を起こしたい。
- 6) 『女性満洲』満洲女性新聞社・女性満洲社 1942～43年。同誌については本稿Ⅲに述べている。
- 7) 杉山春『満洲女塾』新潮社 1996年、124、128頁。
- 8) いけ花史については、拙稿「いけ花史試論」前編・後編『いけ花文化研究』創刊号・第2号 国際いけ花学会編 2013、2014年を参照されたい。
- 9) 池坊、古流、未生流、遠州流など。様式として「<sup>せい</sup>生花」を持つ。
- 10) 満鉄の福利厚生活動について、ほかに母子健康相談、慰安会、運動会などがあった。「留守宅便り」1939（昭和14）年 満鉄映画製作所（『満鉄記録映画集』第九巻 満鉄会監修 日本映画新社 1998年）
- 11) 『主婦のお買物案内』満鉄社員消費組合 1938年。西原和海氏のご教示による。
- 12) 堀川晶仙『はちきん―堀川晶仙自伝』八坂書房 1989年、38～95、237～279頁。同書によれば、堀川晶仙（一楓）氏は1910（明治43）年生まれ。
- 13) 前掲注（12）『はちきん―堀川晶仙自伝』73、74、88、89頁
- 14) 土峰流は、高知市で立石一有が創流したいけ花の流派。前田紅陽『土峰流 立石一有作品集』第一芸文社 1941年に詳しい。
- 15) 前掲注（12）『はちきん―堀川晶仙自伝』55頁
- 16) 前掲注（12）『はちきん―堀川晶仙自伝』61、62頁
- 17) 前掲注（12）『はちきん―堀川晶仙自伝』63、64頁
- 18) 塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館 2004年、110頁
- 19) 「抛入（花）」と「投入花」は、共に「なげいればな」と称するが、いけ花用語として異なるいけ花を指す。「抛入（花）」は決まった形（様式）を持たないいけ花をさし、「投入花」は「盛花」とともに決められた形を持ち、近代のいけ花の様式としてある。
- 20) 前掲注（14）『土峰流 立石一有作品集』による。

- 21) 前掲注(5) 小林報告「いけ花にみる「満洲」都市部の女性と文化・教育」による。
- 22) 勅使河原蒼風『私の履歴書 文化人6』(昭和40年6月日本経済新聞掲載) 日本経済新聞社編 日本経済新聞社 昭和58年  
この蒼風との出会いを、堀川は前掲注(12)『はちきん—堀川晶仙自伝』77～82頁に記している。
- 23) 『草月箋』66号 昭和14年7月号。ラジオ放送番組については、辻泰明「初期ラジオ放送における、いけ花講座番組 —メディアが文化の伝播に果たした役割—」『いけ花文化研究』第2号 国際いけ花学会編 2014年に詳しい。
- 24) 『草月箋』64号 昭和14年5月号ほか。
- 25) 『草月箋』75号 昭和15年4月号, 同76号 同年5月号, 同77号 同年6月号
- 26) 前掲注(12)『はちきん—堀川晶仙自伝』40, 41, 62頁
- 27) いけ花と「修養」についての論考に、上野見平「花と「感化」する身体 —「修養」としてのいけ花—」『いけ花文化研究』第2号 国際いけ花学会編 2014年がある。
- 28) いけ花を「精神修養」とする捉え方は、「内地」では、特に1940年ころから見出せる。拙著『「花」の成立と展開』和泉書院 2007年, 260, 288, 323, 372, 383, 385頁。拙稿「近代日本のキリスト教主義女学校と精神修養 —いけ花・茶の湯・礼儀作法・武道との相関を通して—」『日本の近代化とプロテスタンティズム』上村敏文・笠谷和比古編 教文館 2013年, 272, 273頁ほか。
- 29) 山室信一『キメラ 満洲国の肖像』増補版 中公新書 2004年, 252頁

## 謝辞

史料閲覧に関し、高知県立文学館、一般財団法人草月会資料室にお世話になりました。記して深謝申し上げます。

本稿は2009年10月、日文研劉建輝班共同研究会 於国際日本文化研究センター、2011年9月、張学良与九・一八事变国際学術研討会(於中国瀋陽)、2014年5月、マイグレーション研究会 於阪南大学あべのハルカスキャンパスにおける報告を基にしている。各会においてご教示を賜りました各位に、記して深謝申し上げます。